

【多摩丘陵・私の出会った生き物たち 7】

< キアシナガバチとの夏 >

桑原紀子

二階のベランダに最近アシナガバチがよく飛んできます。

アズの大木が枝を広げて葉陰を作っているベランダは、洗濯物を干したり、猫が昼寝をしたり、室内の暑さから逃げ出して読書をするのにとってもいい場所なのです。

洗濯を干す私の傍を黄色と黒の模様がスーとかすめます。見覚えのある姿、キアシナガバチに違いありません。スズメバチに近い仲間で、大きさも2cm 以上あり、長い後ろ脚を垂らしてスピードを上げて飛ぶ姿はなかなか迫力があります。

ベランダの片隅に棧だけの古障子を立て掛けているのですが、どうやら蜂はそれを牙でガリガリ削って巣材に運んでいる様子です。木の繊維を唾液と練り合わせてパルプにして、丈夫な巣を作るのです。

どこに巣を作ったのか、家主としては知っておく必要があります。

巣は二階の軒の下、風雨を防ぐ条件の良い場所にすぐ見つかりました。見上げるとすでに立派で、沢山の蜂が守っています。気がつかない内に新しい同居者の数は増えていたのです。

もう黙認するしかありません。蜂は巣材も、餌の青虫も多い我が家が気に入ったのですから。蜂がいなくなる秋まで、私が日々注意深く行動するしか共存の道はないのです。

数年前ベランダでいきなり脚にチカッと疼痛を感

じました。キアシナガバチです。かなり痛く腫れたのですが、抗ヒスタミン軟膏でなんとか治まりました。



(何故刺したのだろうか?)と不思議でしたが、後になって蜂は黒や青色、ひらひらしたものを嫌う事を知りました。その時まさに私は青い光沢の入った黒い薄手のひらひらしたズボンをはいていたのです。

蜂はとんでもない敵と思って攻撃したのでしょう。

私は蜂のいるところではもう決してそのズボンは穿きませんでした。

蜂との共存の日々、思い

がけない発見の楽しさもありました。

暑かった今年の夏、蜂も喉が渇らしく、メダカの鉢の水を飲みに次々にやって来ます。滑らないように縁に踏ん張って止まり、飲み終わると満足して、前脚で触角をしごいたり顔をなでたりして手入れします。その様子が猫そっくりで笑ってしまいました。巣の中に病気を持ち込まないための知恵でしょう。

雄蜂は針が無く刺せない事、巣の上に群がっているのは兵士ではなく、秋の交尾行動のために働き蜂に養われている雄蜂と雌蜂だという事など、蜂の世界は不思議な事がいっぱいです。

今日も横目で見ていると、蜂も私を横目で見えます。

秋の終わりまで、ちょっと危険な楽しみはもう少し続きそうです。

